



画「駒の雪」



「駒の大池」 檜枝岐温泉観光協会提供

南會の神秘境

會津駒ヶ嶽の花園

文 小林金次郎
書 熊田 大三

る探を

その高さ二二三米、頂上雪を被ひ南會津の雪を突いて立つ駒ヶ嶽も、北海道の駒ヶ岳に異を取られて泣き入りしてゐたけれども一度この山に登る人は駒ヶ嶽の花を知ることによりこの山を忘れることはできないであらう。

人の學生の犠牲者を出してゐる時は大正十五年十月十八日この山へ登つた早稲田大學生二人「吉野玉雄」「西田健哉」二君である。

登山の時としてはかなり遅い上にこの日は大濃霧と風雪に覆はれたのである。

山上におけるトラザル、二人

はこのガスとストームに追はれて遂に路を踏み違ひて澤へ溺れ下つてしまつた。かうした危険な時に最も難はれ易く且つ憐れませられるのは澤の深さである。普通に考へれば水の流れる澤を岩壁へに下ればやがて下へ出ると考へるであらう。然し水そのものは下へ下へとゆくかも知れないが人間はさうはゆかない、或るときは淵となり或るときは瀑布となり、或るときは絶壁となつて到底ゆくことは出来得ないところへ行つてしまふ。疲勞してゐると氣に憂ひのあることも、寒さによつて人は行くことも引き返すことも出来得なくなるのである。兩君もあはれさうした澤深く吸ひ入つた爲にその行く手を断はれ力を失つて倒れたのである。そして降り着く眞白き雪の上にあたら赤き血に染える情熱の魂を抱いて永眠して行つたのであつた。

友を悼む眞摯の情の結晶は今その麓に遺骸の碑に觸つてゐる丁度三週忌である昭和三年十月十八日、早稲田早稲田長の終文による立派な一基である。

然し駒ヶ嶽なる路をたどりつゝ駒ヶ嶽を征服するならば少しの危険もない。

頂上まではゆる／＼と二時間歩すが、やゝ中腹までは濃葉樹の林、針葉樹林との合するあたりに延綿した水がある。これは道から左手に約五十間ばかり下る澤の地でとても冷たい水が随處からこんこんと湧いてくる。

こゝで一息をついて大木の地の上に降けた上や丈を渡する處の中心を分けてゆけば、やがて一畝に四方が廣くところ、お花畑の入口となる。こゝには藍色の可愛いい「南京小櫻」が一面に生え「ちんくるま」の白い花も笑ましく、雪渡には「シヨウジヨバカマ」のうす桃色がよく似合、その他名も知れぬ花がなだらかな斜面を埋て一面に咲きほこつてゐる。

この山での珍らしい高山植物は「タカネヒメウメバチ草」でこれは曾て明治三十年頃に星大宮先生が発見されて其のまゝになつてゐたが檜枝岐村の星角五郎氏がこれを帝大植物分館に送つてより牧野博士により大正七年に「タカネヒメウメバチ草」と命名されたものである。今これを採取せんと學生がやつてくるけれどもなか／＼容易に発見することのできないといふ。この駒ヶ嶽に登れば、天氣のよい日には日本海の白帆も見えんといふ。

眞夏の陽を浴びつゝ万年雪に驚き空の彼方に霞かき日本海を見る喜びは又山へ来る人にのみに與へられる賜でなければならぬ。

頂上近く小さき水溜りがあり雪解け水の冷き銀命水金命水をたゞへては露の住家となる。

スケツチは駒の雪

訂正昨夕刊第三段の終り「大温泉」とあるは「大湯原」の誤植に付訂正

水田創始の誓

画

沼澤沼へゆく道より

見下ろした村の一部と

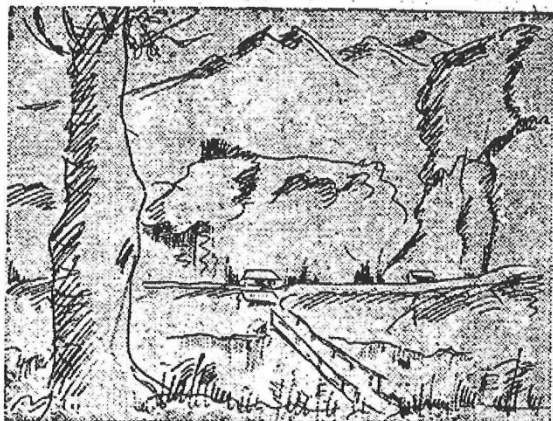
問題の水沼橋

写真

平野文治翁と碑

南會の神秘

る探を境



文 雀
小 熊 田
金 次郎
大 三

水田創始の誓

上、平野文治翁（大桃）
大桃の部落に入る、すると今迄
一變の稲葉さへ見出すことにな
かつた人々も始めて水田より來
る涼風を味はふことができる。
今この水田を持つ村人の幸福を

作つた人は誰であらう、平野文治
翁その老人である文治翁は弘化
三年五月二日稲葉を館山村奥原
に上げたが、明治三年三月大桃
の平野家へ歸郷子としてその土
を踏んだのである。

しかるに當時内川、野風、大
原、小笠原、大桃の五ヶ村は戸
数八十二、人口五百八十四を有
しながらい一枚の水田さへもな
かつたのである。しかも木材、
薪炭その他の産業による僅な收
穫では到底糊口を養ふことが
は困難であつた。第一に必要な
常食、それはコメの問題である
翁はこゝにおいて豊原より稲苗
を取り寄せ試みにこれを植ゑる
に相當の成績を上げることがで
きた。それで村人へもこれを本
いに奨励したが誰一人願ひする
ものは無く却て（物好き者）と
冷笑する者が多かつた。けれど
も翁の村を思ふ心は決してこれ
に屈せずして今は豊原にて開拓
に従事し苦心を重ねて四畝歩の
水田を興事に作つたのである。
こゝにおいてかざすが頑迷な村
人も始めてその深き眼よりさ
めて進んで翁にこれを習ふに至
つたのである。一角を譲れば終
ち山も豊す畑に溢れず、忽ちに
して水田は生れ、現在十畝町の
水田の稲穂が青々と風にぞよぐ
のである今村の入口にはこの翁
の事蹟を記念すべきために記念
の碑が立つてゐる

（水田記念碑文）
平野文治翁古來大桃に水田無
きを憂へ萬難を排して数畝を
開く爾來歳々收獲を見ず刻苦
難耐七畝を越えて始めて成功
の喜びを得たり今日庶民が拾
余町の水田により其收獲を見
るは全く翁の賜なり、仍て茲
に庶民相繼して永久に之を記
念す（大正十年一月一日建立）
翁の事業の主とするものは水田
の開拓にあるが、既にこれのみ
に止らずして地方民を遊説して
官有林を拂下たこと、橋梁築設
道路修築等の公共事業に盡力し
た外、實業的には行路人の難を
救ひ、又日露戦争時には軍需
費に多大の費を投じたなど歟へ
きれぬ愛國者のためにその勞を
賢して居られる。

なには皆が貧めて下さるのには
しい大罪です。わしも八十八
まで生きたいと思ひます」
と言はれる。八十六の額にはそ
の古昔の辛苦をかたる皺の跡
がはつきりと浮んでゐる。
下、大竹半左右衛門翁
（沼澤）
沼澤沼へたどり着く途にこ



水を利用することにより水田を
作るべく苦心したのである。
しかも氏はこの事業のために
官金を借借したのである、當時
の規定として官金を借りて事業
をなす者は若しその事業途中に
おいて挫折するか又は全く失敗
に歸した時は死をもつてこれ
を償ふことになつてゐた。故に

本郷の如く、彼を待つも
（たゞ死の宣告のみであつ
た。然しこゝで眼念の眼を閉じ
てしまつたならば現在の幸福は
生れなかつたであらうが、氏は
最後の一息に際し
「もとい死は償ひの前のこ
と、村民の幸福のために一
度、息を止らぬ」
と奮然とした、もとい大なる
會津侯の情は決して義人の命を
無爲にはしなかつた、もう一年
の餘裕を大竹氏へ賜へたのみか
これに對する色々の物資を授け
られたのである

大竹氏の喜びは如何ばかりで
あつたらうか、だがしかしこの
氏の事業は全く命を降いての大
努力でなければならなかつた。
しかも沼澤の山には「藤」の
樹を立て、死を畏の前にしつゝ
死の狂ひの力でこれに従事し
た。この眼に對して如何なる意
義なきものも味方せぬはなく遂
に沼澤沼には房々金の稲穂が
實つた
今湖畔には「春秋居士」なる
碑が建てられてゐる
スケッチ 沼澤沼へゆく
道より見下した村の一部と問題
の水沼橋は平野文治翁と碑